

エゾシカWGによる調査項目の優先順位の設定(案)

優先順位	調査(あるいは事業)名	目的・意味	調査方法	頻度	単年度に必要な予算額	備考
1	半島全域採食圧調査	現状では知床岬と、幌別・岩尾別台地の一部しかエゾシカによる採食圧状況は明らかになっていないため、遺産候補地において、どの植物種がどの程度危機的状況にあるのか、全体像を全く把握できていない。従って、エゾシカの管理方針を決定するためには、半島全域の採食圧調査を行い、現状把握することが必要不可欠である。	半島全域に、○箇所調査区を設定し、植生調査を行う。	まず1回行い、必要に応じて5～10年後に再調査を行う。	約800万?(標高300m以下の地域を対象とし、1年で行った場合)	
2	個体数調整の効果測定調査	フェンス設置は、植生回復に有効な方法であるが、生態系プロセスから完全にシカを排除してしまう欠点がある。フェンスを設置せずに、シカによる採食圧を軽減し、適正密度を推定する1つのオプションとして、個体数調整があるが、その手法と効果は未知数であり、実験する必要がある。特に半島基部において個体数調整を行った場合、遺産候補地内の個体数に影響を与えるのか、調査する必要がある。	半島基部、あるいは遺産地域内において個体数調整を行い、効果を測定するためのライトセンサス、植生調査を同時並行して行う。	林床植生の変化を把握するために、5年間継続して行う。	個体数調整、植生調査の規模を確定しなければ、算定不能。	個体数調整を行う場合、猟友会の協力が不可欠である。
3	シカの高山帯への進出状況の調査	高山帯の植生は特に脆弱であり、一度破壊されると回復が困難であるが、この地域にどの程度シカが進出しているかは把握されていない。従って、現状把握のために調査を行う必要がある(1に含まれる可能性有り)。	各種痕跡調査、登山者に対する目撃アンケート調査等を行い、シカの高山帯利用の有無を把握する。	まず1回行い、必要に応じて5～10年後に再調査を行う。	登山者に対するアンケート調査だけなら、最低数万円で可能。痕跡調査を行う場合、遺産候補地内で約100～200万?	